

「現代首里方言」動詞のティ形について

花蘭 悟

【キーワード】 沖縄語、沖縄方言、中止形、テ形、連用形

1. はじめに

沖縄語には次のような動詞の形が存在する。

(1) sutumiti ʔukiti, cira ʔarati, munu kadi,
朝.ゼロ格 起きる.ティ形 顔.ゼロ格 洗う.ティ形 ご飯.ゼロ格 食べる.ティ形

gaQkoo-Nkai ʔNzaN¹. (朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて、学校に行った)
学校 - に 行く.叙述法

下線部は()内にしめした翻訳からわかるように日本語のテ形に相当する形である。本稿は沖縄語における「ティ形」の意味・用法について現代の散文資料によって観察し、どのような用法で用いられているかについての観察をすることを目的とする。

2. 日本語のテ形と沖縄語のティ形

2.1. 日本語のテ形

日本語(標準語、共通語、東京方言)の動詞や形容詞などは中止形として、連用形(第一中止形)とテ形(第二中止形)をもつ。

・子音変化²

出す das-u・出し・das-i・出して dasit-e 書く kak-u・書き kak-i・書いて

¹ 沖縄語の表記は基本的に国立国語研究所1963にしたがう。各語の下に日本語によるグロスと文末に日本語訳をつけるが、グロスは紙幅の都合上、必要な範囲で表記する(たとえば(1)の文末のʔNzaNは「行く.終止形完成相過去.叙述法」とでもしなければならぬのだが「行く.叙述法」とする)。なお、現在、琉球語学でグロスのつけ方について議論がなされているということである。

² 各音便語幹を代表するもののみを記し(たとえば「泳ぐ・泳ぎ・泳いで」はイ音便とする)、また例外(「行く・行き・行って」)は記載していない。

kait-e 飛ぶ tob-u・飛び tob-i・飛んで toNd-e ある ar-u・あり ar-i・あって aQt-e

・母音変化

着る ki-ru・着 ki・着て ki-te

・特殊変化

する suru・し si・して site 来る kuru・来 ki・来て kite

日本語の第二中止形は末尾に-テと-デがであるが、語幹部分に /N/ [撥音] があらわれるナ行・バ行・マ行動詞の子音変化動詞の場合以外は-テの形であることから、これで代表させてテ形と呼ばれることが多い。

1. 2. 沖縄語のティ形

さて、沖縄語は、明治時代の B. H. チェンバレン以来、日本語と系統関係が証明されている言語であり、文法や基礎語彙の多くが共通あるいは共通の基盤を持つが、沖縄語の中止形も類似した形で構成される。すなわち、日本語のテ形が音便語幹に-e を付着させるように、沖縄語の中止形も動詞の音便語幹に-i がついた形であり、動詞活用のタイプによって以下に示すような形がある。なお、沖縄語の連用形 (ʔici=「行き=」) は派生動詞の語基になったり (ʔici=busaN「行きたい」)、複合名詞を形成するが、日本語の連用形のように文中で単独で用いられることは基本的にない³。

ティ形のつくり方は同じ形になるものをまとめると以下ようになる。沖縄語は辞書形が -(u)N の形でおわるのだが、日本語において形の違っていた動詞が同じ形となっているものが数多くあり (「書く kaku」「勝つ kat[u]」が kacuN など。連用語幹が口蓋化したことによる)、辞書形(連用語幹)からティ形(音便語幹)を作るにはやや複雑なルールが必要となる⁴。

・規則変化

-Nの前が[i (/ju)]: [ラ行動詞] → -ti

tuiN/tujuN (取る) → tuti (取って) kooiN/koojuN (買う) → kooti (買って)

³ なお、中止形としてはもちいられるものには「ティ形」のほかに「アーニ形」とよばれるものが存在する。4章で少し触れる。

⁴ なお、基本形(連用語幹)から否定形(基本語幹)を導く際も同じようなルールが必要である。

〔例外〕 ciiN(切る), ?iriiN(入れる) → ciQti(切って), ?iQti(入れて)
ciiN(着る), 'iiN(座る) → cici(着て), 'ici(座って)

-Nの前が「bu / mu」: (マ行・バ行動詞) → -di

'jumuN(読む) → 'judi(読んで) tubuN(飛ぶ) → tudi(飛んで)

-Nの前が「nu」: (ナ行動詞) → -zi

sinuN(死ぬ) → sizi(死んで)

-Nの前が「su / cu ①」: [サ・カ行動詞] → ci

sasuN(刺す) → saci(刺して) nacuN(泣く) → naci(泣いて)

-Nの前が「cu ②」: [タ行動詞] → Qci

kacuN(勝つ) → kaQci(勝って) tacuN(立つ) → taQci(立って)

-Nの前が「zu ①」: (ガ行動詞) → zi

'wiizuN(泳ぐ) → 'wiizi(泳いで) nuzuN → nuzi(脱ぎます)

-Nの前が「zu ②」: (ダ行動詞) → ti

niNzuN(寝る) → niNti(寝て) kaNzun(被る) → kaNti(被って)

〔例外〕 kuNzuN(くくる・縛る) → kuNci(くくって・縛って)

・不規則変化

- ・ ?aN(ある) → ?ati(あって) ・ 'uN(いる) → 'uti
- ・ suN(する) → Qsi(して) ・ cuuN(来る) → Qci(来て)
- ・ ?icuN(行く) → ?Nzi(行って) ・ ?juN(言う) → ?ici(言って)
- ・ 'NNzuN(見る) → 'NNci(見て)

沖縄語の動詞活用のタイプを計量的に検討した研究は見当たらないが、ラ行動詞が最も多いと思われることからその中止形である形で代表させてこの形を「ティ形」と呼ぶことにする⁵。

1.3. 資料

なお、本稿は近年(2010年代前後)に沖縄語で書かれた散文を資料とする。こ

⁵ 筆者が東京外国語大学留学生日本語教育センター編1994の動詞を沖縄語になおした一覧を作成した際、ラ行動詞が一番数が多かった(390のうち196と半数をこえ、サ変動詞といべき名詞にsuN[日本語のスルの相当]がついたものがそれに続く)。ただし、これは沖縄語の資料を分析したものではないので参考程度にとどめておいたほうがよいだろう。なお西岡敏・仲原譲2006では日本語教育・日本語学の用語法にならって「テ形」としている。

れらは最近書かれたものであり、日本語の影響を大きく受けているかもしれないのだが、それらを書いたインフォーマントの直感を調べることができるという利点があり、また将来的にはこれらと過去のデータなどを比較することにより沖縄語の変化を調べる資料になることも期待される。また、調査対象とした文は沖縄県で行われている「琉球諸語継承事業『書いて残そう 島々の言葉』」という作文コンクールで集められたものなのだが、その中の「沖縄語」(沖縄中南部方言)でも地域に差があるようであるため、そこに掲載されたものから70歳代(2013年秋時点)の首里方言話者に依頼して首里方言らしいと感じられたものを選んでいただいた⁶。

以下、第2章でティ形が転成したり、派生動詞として使用されている例を見、3章でティ形が単独で使われている例を観察する。第4章でそれらをまとめ、今後の展望を考えたい。

2. 中止形以外の「ティ形」

まず、ティ形が文中で単独の語として用いられず、他の単語や接辞などの形態素に転成しているものをあげておく。

2.1. 接続詞

?aN Qsi:「そして」

(2)?aNQsi Qcui-nu 'warabi-nu …
そして ひとり-の こども-が

「?aNQsi」は「?aN(ああ)」と「Qsi(する・ティ形)」がむすびついたもので、日本語の「そして」と語構成的には同じものである。

2.2. 補助動詞と結びついて派生動詞をつくるもの

日本語で「読んでいる」「読んでしまう」など動詞のティ形と補助動詞が結びついた派生動詞が形成されるが、沖縄語のティ形も同様にティ形と補助動詞が結びついて派生動詞が形成される。-ti neeN(「～てしまう」)、-ti ?icuN(「～していく」)、

⁶ 沖縄語の用例のうち、出典を示していないものはこのコンクールの文集からとったものである。

-ti cuuN(「～してくる」)、-ti 'NNzuN(「～してみる」)、-ti misiiN(「～してみせる」)、
-ti turasuN(「～してやる」)、-ti kwiiN(「～してくれる」)など。(3)に -ti kwiiN(「～
してくれる」)の例をあげておく。

- (3) [ʔakisamijoo, ʔaNmaa-joo, ʔucinaa-Nkai keeci kwi-misooree]
(感動詞) お母さん-よ 沖縄-に 帰す.ティ形 くれる.連用-尊敬接辞.命令法
 (「ああ、お母さん、沖縄に帰らせてください」)

2. 3. 助辞

以下の助辞は動詞のティ形を起源とするものである。

- ・-Qsi (suN「する」のティ形):「で」(材料・道具)
- ・-'uti ('uN「いる」のティ形)、-ʔNzi (ʔicuN「行く」のティ形):「で」(場所)

2. 4. 後置詞

Chamberlain (1895) は本稿で助辞と認定するものを「後置詞」としているが、「準後置詞」として、-ni ciiti (について)、-ni 'Nkati (にむかって) をあげている。沖縄芝居に次のような例がある。

- (4) ʔjaa-hjaa siiza-Nkai 'Nkati ʔaNsi-ru munoo
おまえ-接辞(やつ) 兄-に むかって あんな-強調助辞 もの.とりたて形
 ʔii-kwairu-i (おめえは兄ちゃんに向かってそんな言い方をするのか)
言う.連用形-やがる.連体-疑問接辞 (真喜志康忠原作『多幸山』琉球新報社)

2. 5. 接続語形

日本語のテ形にとりたて助辞をつけた「読んでも」「読んでは」は単にテ形がとりたてられた形ではなく、「逆条件」「テハ条件」などの意味をあらわすひとつの語形を形成しているといえる。沖縄語でも同様な現象がみられる⁷。

⁷ 本稿では動詞の中止形を「ティ形」としたが、そうすると「しても」にあたるものは「ティン形」などと呼ばなければならなくなる。日本語を母語とするものには「て形」「ても形」とした方がわかりやすいかもしれない。本稿のティ形を西岡敏・仲原譲 2006 が「テ形」としているのにも一理があるといえよう。なお、条件形を語形のまま「ラー条件形」「エー条件形」(それぞれ日本語の「なら」「～ば」に近いもの)と呼んでいる例もあり(かりまたしげひさ 2012 など)、用言の語形をどのように呼ぶかについては今後研究を進めていく中で考えていくべき問題であろう。

(5) caQsa 'jud i-N, nuu-N wakaraNtaN. (いくら読んでもなにもわからなかった)
 いくら 読む、ティ形-も なに-も わかる、否定、過去、叙述 (作例)

(6) ?eetii-nu 'wabi-Ndi ?iinee ?eetii-Nkai tii kakitee naraN
 相手-が 詫び-と 言ったら 相手に 手、ゼロ格 かける、ティ形、とりたて ならない

(相手が詫びを言ったら、相手に手をかけてはならない)

3. 動詞の中止形として用いられるもの

日本語のテ形は中止形として用いられた場合、その用法は「継起」「状態」「理由」「並立」の4つに分類されることが多い⁸。

- (7) 継起 : 映画を見て、帰った。
- (8) 付帯状況 : 手をふって、歩く。
- (9) 理由 : 風邪を引いて、遊びに行けなかった。
- (10) 並列 : 太郎は遊んで、次郎は勉強した。

沖縄語においても、上の分類がほぼ踏襲できる。

3.1. 継起

次の例は「取る」が「食べる」、「始まる」が「続いてきた」、「手入れをする」が「来ている」という動作にそれぞれ先行していることから継起の例だと考えることができるだろう。

(11) taa-kara sjee-gwaa tuti, kadai soo-ibiiN.
 田-から ばった- (指小辞) 取る、ティ形 食べる、タイ(たり)形 している、尾略形-丁寧体接辞、非過去 叙述法

(田んぼからバツタを取って、食べたりしていました)

⁸ 言語学研究会・構文論グループ1989は動詞「第二なかどめ」の用法を大きくは「Ⅰ主要な動作と副次的動作との複合、Ⅱ、主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合、Ⅲ、第二なかどめでさしだされる動作が主要な動作の特徴づけになっている場合、Ⅳ、第二なかどめの動詞が具体的な動作をさしだして、定型動詞がその動作を意義付けている」の4つに分類している。日本語記述文法研究会2009は品詞にこだわらず「並列」「対比」「前触れ」「継起」「原因・理由」「逆接」「順接条件」「付帯状況」の8つに分けている。

(12) ?ucinaaguti-nu ciNzi-ja meeziseefu-nu haihaNcikeN-nu
沖縄語-の 禁止-は 明治政府-の 廃藩置県-の

tuci-kara hazimati, taisjoo sjoowa-nu hazimi-madi cizi cabitaN.
時-から 始まる, ティ形 大正, ゼロ格 昭和-の はじめ-まで 続く, ティ形 来た, 叙述法

(沖縄語の禁止は明治政府の廃藩置県の時から始まって、大正、昭和の初めまで続いてきました)

(13) ?amerika hwiitai ziN-ja ?unu mama, mata tiiri Qsi cicoo-ibiitaN.
アメリカ 兵隊 服-は その まま また 手入れ する, ティ形 着ている-丁寧体接辞, 過去

(アメリカの軍服を そのまま または 手入れをして 着ていました)

3. 2. 付帯状況

次の文では文末の述語であらわされる動作がどのような状態でなされているかがティ形で示されているし [(14)], (15) でティ形の動作が述語であらわされている動作 (波線部) で具体化されている。

(14) ?uQsa-madi ?utikawataru 'Nmarizima tada 'Nnabai Qsi
それだけ-まで 変貌する, 過去, 連体 故郷・ゼロ格 ただ ただ見ること する, ティ形

tacikuNpai sootaru 'uraN nataru ?inagunuuja-nu sigata-ja ...
立ち往生 している, 過去, 連体 いる, 否定 なる, 過去, 連体 母親-の 姿-は

(これほどまで変貌した故郷をただ茫然として立ちつくしていた今は亡き母親の姿は…)

(15) nama-nu 'warabiN-caa-ja 'waQtaa-tu muru kawati, munu-ja 'juciku nati,
今-の 子ども-たち(複数接辞)-は わたしたち-と 全部 変わる, ティ形 もの-は 豊かだ, 連用 なる, ティ形

namaa zuku-nu-jaa, ciiku-nu-jaa-Nci ?icunasaru warabiN-caa Nzi-inee ...
今, とりたて 塾-の-は 稽古-の-は-と 忙しい, 連体 子ども-たち(複数接辞) 見る, 条件

(今の子供たちは私たちと全く変わって物は豊かになって、今は塾だ習い事だと忙しくしている子供たちを見ると…)

3. 3. 原因・理由

(16) (17) のような例を原因・理由をあらわすものと分類したが、この意味・用法に関しては時間的な先行・後続の関係の派生的な意味であるとみる立場も存在するだろう。

(16) [ʔ juu ʔ jusiti kwi-misooci, nihwee deebiru]

よく 忠告する. ティ形 受益-尊敬接尾辞・ティ形 ありがとうございます

(よい 御忠告をしていただいて、ありがとうございます)

(17) ʔansi cui-nu ʔwarabi-nu ʔiQpee ʔjaasiku nati, sibugaki muti

そして ひとり-の 子ども-が ととも ひもじい. 連用形 なる. ティ形 洪柿. ゼロ格 もぐ. ティ形

kadaree, cisiti, [ʔakisamijoo, ʔaNmaa-joo, ʔucinaa-Nkai keeci

食べる. 条件形 下痢する. ティ形 (感動詞) お母さん-よ 沖繩-に 帰す. ティ形

kwi-misooree] Qsi tiNsama keeriti siNsii-taa ʔuoosao

くれる. 連用 尊敬語接辞・命令 する. ティ形 わめきさわぐ. ティ形 先生- (複数接辞) 右往左往

simatee-ibiitaN

させる-丁寧体語尾. 過去. 叙述法

(そしてひとりの子どもがとてもひもじくなって、洪柿をもいで食べたところ、下痢をして「ああ、お母さん、沖繩に帰してください」といって、わめき騒いで、先生たちを右往左往させました)

3. 4. 並列

日本語のテ形の並列というと、主語が異なり、前と後ろを入れ替えることが可能なものが代表的であると思われるが(「今朝、太郎は図書館に行って、次郎は遊園地に行った」)、そのような典型的な例は今回の資料には見当たらなかった。下の例では、波線を付したティ形で示されたものに対し二つのティ形はその動作を具体的に述べるという付帯状況的な意味であるが、下線で示した二つのティ形同士は同等の資格でむすびついていると思われるため、並列に分類した。

(18) ʔ jagati ʔucinaa-Nkai keeti caa-bitasi-ga, ʔNmarizima-ja

すぐに 沖繩-に 帰る・ティ形 来る-丁寧体接辞・過去・尾略形-(形式名詞)-が 生まれジマ(故郷)-は

ʔucikawati, miisiraraN nati, ʔjaa-N ʔisjigati-N kikaci-N neeraN nati,

すっかり変わる. ティ形 見知らない. 基本形 なる. ティ形 家-も 石垣-も 木の垣根-も ない. 基本形 なる. ティ形

(すぐに沖繩に帰ってきましたが、故郷はすっかり変わって、見知らぬようになって、家も、石垣も、木の垣根も なくなって、)

4. おわりに

本稿で示したことは、沖縄語のティ形の用法が日本語のテ形のそれとほぼ並行的であるという、ある意味平凡な結論であった。ティ形の機能が基本的に事態を結びつけるというものであるとしたら、日本語のテ形とさほどのちがいが無いということは当然と言えば当然のことなのかもしれない。本稿は以上のことを確認したにとどまるが、最初に述べたように資料としたものが現代に書かれたものであることから、日本語の影響を多分に受けている可能性があり、今後、方言会話や民話の書き起こし、沖縄芝居の「脚本」などのデータをなど、沖縄語に豊富に存在する言語資料をも調べて、日本語のテ形と大きく差がないかどうかを調べていきたいと思う。

また、日本語には連用形（第一中止形）とテ形（第二中止形）のふたつの形が存在するが、脚注3でのべたように沖縄語にも もうひとつの中止形ともいうべきアーニ形という形が存在する。

- (19) haNmee tuicameejuru tami, hazi kaikuN saani ?Nmu sitatiti
食糧、ゼロ格 取り集める・連体 ため 荒地 開墾 する、アーニ形 芋、ゼロ格 育てる、ティ形
- ʔasabaNoo, gaziri-?Nmu-gwaa, taaci-naa 'ja-ibiitaN.
昼ごはん、とりたて やせ細る、連用 芋-指小辞 ふたつ-ずつ 繫辞-丁寧体接辞、過去、叙述形

(食料を確保するため、荒地を開墾して、芋を栽培し、昼食はやせた芋が2個ずつでした)

上はアーニ形とティ形が共存しているものであるが、これらの意味のちがい、さらに共存関係など調査すべき課題は多く残っている。

資料

対米請求権事業協会編 2011『第2部 書いて残そう 島々の言葉～琉球諸語継承事業～』
対米請求権事業協会

参考文献

- 奥田靖雄 1952「日本語動詞の語幹について」『コトバの科学』7 民主主義科学者協会言語科学部会 (奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』むぎ書房、所収)
- かりまたしげひさ 2012「はじめての人のためのシマクトゥバの文法 (2)、(3)」
シマクトゥバ・プロジェクト連続講義 (於 沖縄県立博物館) 資料
- 金城朝永・服部四郎 1955「琉球語」『世界言語概説 下巻』研究社
- 言語学研究会・構文論グループ (奥田靖雄) 1989「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」言語学研究会編『ことばの科学2』むぎ書房
- 国立国語研究所編 1963『沖縄語辞典』大蔵省 (現 財務省) 印刷局
- 鈴木重幸 1960「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』41 集 国語学会
(服部四郎他編 1979『日本の言語学 第四巻 文法Ⅱ』大修館書店、他所収)
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 1994『初級日本語』凡人社
- 中松竹雄 1973『沖縄語の文法』沖縄言語文化研究所
- 新川 忠 1990「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめの共存のばあい—」
『ことばの科学4』むぎ書房
- 西岡敏・仲原譲 2006『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチ— 改訂版』白水社
- 日本語記述文法研究会編 2009『現代日本語文法6 第11部複文』くろしお出版
- 村木新次郎 1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Chamberlain, B. H. (1895) *Essay in Aid of Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*. (山口栄鉄訳 2005『琉球語の文法と辞典』琉球新報社)

【付記】

沖縄語表記のチェックをしてくださった中松竹雄先生 (沖縄言語文化研究所) にお礼申し上げます。なお、本稿は 2013～14 年度 科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究「危機言語教育に対する日本語教育の方法の適用—沖縄語を対象として—」補助金番号 25580088、研究代表者：花蘭悟) による研究成果の一部である。

On “ti-form” of modern Shuri dialect of Okinawan language

HANAZONO Satoru

Japanese and the Ryuukuuan languages are languages which have a parent language in common. In recent years, because Ryuukuuans have been listed as endangered languages by Unesco, research interests are greatly growing.

Verbs of Okinawan language, one of the Ryuukuuan languages, have “ti-form”, the form corresponding to “te-form” of Japanese.

I collected examples of ti-form from writings written by modern Shuri (a dialect of Okinawan) speakers, and classified their usages into four categories.

(1) succession

haru-kara	ʔNmu	tuti,	kadaN.
field.ABB	sweetpotetos.ACC	take.ti-form	eat.past.DEC

(2) sub-action

ʔisu-Nkai	’ici,	sumuci	’jumuN.
chair-DAT	sit.ti-form	book.ACC	read.nonpast.DEC

(3) reason

ʔami-nu	huti,	ikaraNtaN
rain.NOM	fall.ti-form	go.possible.NEG.past

(4) contrast

Taruu-ja	saNsiN	hwici,	Ziruu-ja	mootaN.
taroo-TOP	saNsiN.ACC	play.ti-form	Ziruu-TOP	dance.past.DEC

